

苫米地憲昭先生のご功績

Professor Noriaki Tomabechi's Achievement

小谷 英文 KOTANI, Hidefumi

● 国際基督教大学
International Christian University

ICUの学生相談は、その始まりから独特の歩みを辿り日本の学生相談史の重要なラインを構成している。大学教育における学生相談の歴史に遡るなら、東京大学と広島大学で心理学研究として科研を取り、その経費をもとに最も時間が取りやすい正月に毎年研究会議を開いて、組織、方法、実践事例の検討を重ねる所から体系的な取り組みが始まった。その流れの元は、当時の文部省の発想から学生に対する「厚生補導」であった。したがって学生相談の思想はともすれば、学業あるいは大学コミュニティへの不適応への対処に傾くことも自然であった。それは心理学の専門領域的には臨床心理学に傾倒する流れであり、国立大学から始まった我が国の学生相談運動はそのように展開し、現在の臨床心理士界の重鎮の多くに学生相談の出身者がいる。

これに対してICUの学生相談は、故都留晴夫教授がコロンビア大学からカウンセリング心理学を直接持ち込まれた経緯から、臨床心理学とは一線を画した学生の不適応のみならず、健康で創造的な成長を支援するモデルの構築に進んだ。そのICU草創の種を实らせ、花を咲かせたのが苫米地憲昭教授のお仕事であった。

社会構造の急速な変化から不適応の問題と成長の問題は、心理学的な絡み合いが複雑となり、従来のカウンセリング心理学と臨床心理学という枠組みで単純に分けられるものでもなくなって来た。人格構造的には健康な発達ラインを辿っているにも

かわらず、例えば自傷や自死行為のように、行動的に病理的に見えたり自己破壊に至る症候を示す学生が、学生相談に少なからず見られるようになっていく。青年期の学生が中心の大学コミュニティでは、とりわけ病理と単なる逸脱行為の見極めは難しく、逆に極めて健康に振る舞っているように見えて、病理を進展させていく青年も少なくない。

このような社会的変化の中で、適応、不適応、あるいは病理のみならず、豊かで創造的な人格発達の支援を主務とするカウンセリング本来の軸を追究しつつ、病理にまつわる臨床的な保護と支援の道も開いていく。日本における学生相談の新しい展開のリーダーシップを、ICUのカウンセリングセンターの実践と研究を拠点に、苫米地先生は取って来られた。日本学生相談学会の大きな展開期に事務局長、さらに理事長を務められたことに、その業績の大きさを伺い知ることができよう。

その上で、なお大きな仕事をしてくださった。ICUの大学院に臨床心理学の専門プログラムを創設し、これを維持することは様々な理由で不可能であった。そのもっとも大きなネックの人事上の問題に当たり、カウンセリングセンター長を務めながら大学院の教授を務め、臨床訓練に当たってくださったのである。不可能な仕事を可能にしていく同僚間の空気を暖め、互いの信頼の絆の紐をいつも離さず、われわれを助けてくださった。そのお人柄は、広く知られている。全ての同僚とともに、深く感謝するものである。